

国際ワークショップ

「新疆・中央アジアにおけるウイグル人の社会・文化 と民族アイデンティティ」

新 免 康

2006年11月25日（土）～26日（日）の日程で東京（水道橋・LMJ ジャパン東京研修センター・3F大会議室）にて、国際ワークショップ「新疆・中央アジアにおけるウイグル人の社会・文化と民族アイデンティティ」（International Workshop <<Uyghur Society, Culture and Ethnic Identity in Xinjiang and Central Asia>>）と題し、中国新疆ウイグル自治区・中央アジア諸国のウイグル人社会・文化に関する国際学術会議が開催された。本稿は、本会議のオーガナイザである新免がその簡単な報告を行うものである。（以下敬称略）

2日間にわたった会議は、4セッションから構成され、発表者は全体で9名（そのうちペーパーによる発表が2名）であった。出席者数から言えば規模の小さい研究会であったが、関連分野の主要な専門家が集まり、中身の濃い発表と議論が展開されたと考えられる。

本会議は、新免が代表者を務める日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究A(1)・研究課題「中央アジアにおけるウイグル人地域社会の変容と民族アイデンティティに関する調査研究」とNIHUプログラム・イスラーム地域研究・東京大学拠点・研究グループ1「中央ユーラシアのイスラームと政治」（代表者：小松久男東京大学教授）を共同主催者とし、この2プロジェクトを中核として企画・運営されたものである。とりわけ、前者の科研費研究課題の調査研究による成果の発表とその総括という意味合いを含むものであった。また、(財)東洋文庫「近現代中央アジアにおける民族の創成」研究グループの共催、日本中央アジア学会の後援という形をとった。

本研究ワークショップの趣旨については、新免が会議の冒頭で趣旨説明として述べたが、その要点は以下の通りである。

ウイグル人は、主に新疆のオアシス地域に居住する農民・都市民などの定住民であり、この地域の中心的な民族である。また、カザフスタンの20万人余を始め、旧ソ連領中央アジア諸国にも相当人口を抱えており、このことは、19世紀後半以降、特定の政治的条件に応じて中国領からロシア領・ソ連領にかなりの規模でウイグル人が移住したことに基づいている。

ウイグル人は、中央アジア諸国の各基幹民族に匹敵する人口規模を擁しながら、中国や中央アジア諸国のそれぞれの国家においてマイノリティであり、自らの民族国家をもたないという点に民族としての存在様態の特徴がある。言語・文化・宗教などの面において一定の一体性を具えながら、その居住地は広大な空間の中に点在し、それぞれの地域性と歴史的背景をもっている。その一方で、民族としての枠組と呼称は20世紀になってからのものでありながら、現在の彼らはおしなべて共通的なウイグル人としての民族意識をもっており、それは民族としての求心性の基礎となっていると考えられる。しかし、その民族意識の内実は、現在においても、地域、階層、属する国家などによって一定の偏差を示している可能性がある。

ここで注目したいのは、これらの意識が国家の政策、社会・経済・文化状況、他の民族との関係、それぞれの地域社会がもつ歴史的背景などと密接に関わっていると考えられることである。本ワークショップは、政治的・社会的・文化的諸条件の歴史的変容と現状を勘案しつつ、中国・新疆とカザフスタンにおけるウイグル人地域社会の状況とその中におけるウイグル人のアイデンティティの様態に光を当てるものである。

以下、セッションごとに、各発表の内容の概要を紹介する。プログラムについては本文末尾に添付したので参照されたい。

第1日：11月25日

まず新免がオーガナイザとして挨拶するとともに、会議の趣旨説明を読んだ。それに続く第1セッション（司会：小松久男（東京大学））では、ロシア領末期からソヴィエト領下におけるウイグルという民族的枠組の創出と展開について議論された。

アブレト・カマロフ（カザフスタン共和国教育科学省東洋学研究所）の発表は、中央アジアにおけるイスラーム的伝統に従った歴史叙述から民族史へと移行するプロセスの中で20世紀初頭～ソヴィエト体制初期の状況の重要性に着目し、とくにウイグル民族史の叙述の上で先駆的な役割を果たした、ナザルゴジャ・アブドゥセミアトフによって著された歴史叙述の概要と特徴を紹介した。その上で、とくにそれがウイグルという民族的枠組に沿った歴史叙述へと変容していくプロセスを辿り、その歴史的意義について論じた。

ショーン・ロバーツ（ジョージタウン大学）の発表は、同時期に、ウイグル人としての民族区分以前のアイデンティティのあり方に対し、ソヴィエト領中央アジアにおいてウイグルという民族的な呼称・枠組が採用され、定着していった経緯を政策過程に重点を置きつつ具体的に明らかにした。その上で、ウイグル人呼称・枠組の出現はソヴィエト体制による他の民族の呼称・枠組の導入と類似していること、その一方ではそれがその後のウイグル人の

民族運動に手段を与える作用をもたらしたことを指摘した。

第2セッションでは、第1セッションと同時期およびそれに続く時代の新疆における歴史的局面的局面として、中華民国期におけるウイグル人の教育状況とその中におけるウイグル人の意識様態に関して考察する発表が行なわれた。

清水由里子（中央大学大学院博士後期課程）の発表は、カシュガルで刊行されていた新聞である *Yengi Hayāt* に主に依拠しつつ、1930年代半ばにカシュガルを中心とする地域で展開された教育運動について分析した。その中で、当時の当該地域における近代的な学校教育の顕著な発展が、ソ連の影響下に置かれた省政府の政策の枠組に沿いつつも、ウイグル人自身の主意と活動により推進されたこと、その中で「ウイグル」という民族区分にしたがった民族意識を打ち出す動きがあったことを明らかにした。

他方、王建新（中山大學）の発表は、文献資料と実地調査（聞き取り調査）によるデータに基づいて、中華民国期のトゥルファンにおけるイスラーム教育の基本的な状況について論じた。当時、近代的な改革運動の側からイスラーム教育に対して批判的な見解が打ち出される一方で、イスラーム教育が依然としてトゥルファン地域社会において重要な位置づけを占めており、それは1980年代以降のイスラーム復興とも繋がりをもつことを、代表的なイスラーム指導者の歴史的経験に基づきつつ開示した。

第1日目のセッション終了後、会場近くに位置するイタリアン・レストランにて懇親会が行われ、一般の参加者も交えて親睦が深められた。

第2日：11月26日

午前の第3セッション（司会：澤田稔（富山大学））においては、現代中国の特有な条件下における新疆のウイグル人の社会・文化・教育といった諸側面における具体的な状況、その中におけるウイグル人の民族意識のあり方を検討する発表が行われた。

藤山正二郎（福岡県立大学）の発表は、ホタンのウイグル人が多元的な医療システムの中でどのような治療方法を選択しているのか、それを決定づける要因は何かという点に焦点を当て、ウイグル医学の実態について明らかにした。すなわち、経済状況や複雑な民族関係という背景の下、西洋医学の病院が治療機関としてあまり機能せず、その一方で制度的に保証されたウイグル医学が、西欧医学にできない医療を担う代替医学システムとして重要な役割を果たしていることを具体的な事例とともに検証した。

リズワン・アブリミティ（九州大学）の発表は、ウイグル語を授業言語とする民族学校をとりあげ、ウイグル人社会でウイグル語が維持されている一方で、学校教育の中で漢語教育が強化されてきた過程を分析した。とくに1980年代に打ち出された「民漢兼通」理念に基

づいた政策とその実施過程、その社会・経済的背景、ウイグル人側の意識の問題などについて検討した上で、民族語の運用能力の達成をベースとしつつ漢語への習熟も図るという当該理念が、やがて漢語を主体とするものに変質していったことを指摘した。

新免康（中央大学）の発表は、1980・90年代にウイグル人の間で顕在化した民族史や民族文化に関わる活動について、その具体的な様相と意味合いを扱った。すなわち、新疆領域内における歴史人物の民族文化英雄としての顕彰とその墓廟の建造、伝統音楽のウイグル民族音楽としての整備と演奏活動を通しての宣伝、伝統的な曲芸の民族文化としての強調といった動向が見られ、その背景には民族としての内的求心力の強化と領域意識の発露といったウイグル人指導者たちの思惑があったのではないかと推測した。

26日午後の第4セッション（司会：梅村坦（中央大学））では、近年の中国とカザフスタンのウイグル人社会における政治的な運動と国家の政策との関わりについて検討する発表が行なわれた。

岡奈津子（日本貿易振興機構・アジア経済研究所）の発表は、政策との関連においてカザフスタンのウイグル人社会における民族組織とその活動に焦点を当て、その変容について論じた。すなわち、ソ連末期からウイグル人の組織が設立され、その中には新疆独立派も含まれていたこと、独立後のナザルバエフ体制下において、法律やカザフスタン諸民族会議などの枠組を通じて民族運動を統制する政策が施行され、その下で近年は政府の懐柔策と連動しつつ体制に忠実な指導者の影響力が増していることを指摘した。

ガードナー・ボヴィンドン（インディアナ大学）の発表は、新疆ウイグル自治区におけるウイグル人の民族的な抵抗運動とその表れとしての様々な活動・事件について、その具体的な様相、性格づけ、それらに対する政府側の実際的な対応などについて詳細に検討を加えた。そして、数量的な分析により、2001年以降は表立った事件が減少していることがわかるものの、それはけして経済発展による物質的な充足が抵抗活動を減衰させたことを意味するものではなく、抑圧によって不満が潜在化していることを指摘した。

最後の総合討論（司会：梅村坦（中央大学））では、ディスカッサントの宇山智彦（北海道大学）、堀直（甲南大学）、吉田世津子（四国学院大学）、湯浅剛（防衛研究所）が、それぞれ第1・第2・第3・第4セッションについて、各発表に対するコメントを開示するとともに、質問を投げかけた。これらの問題提起に応える形で各発表者が回答とコメントを明らかにした上で、フロアも含め質疑応答・見解の提示などが行なわれ、ウイグル人の社会・文化と民族意識の歴史と現状にまつわる諸問題について、さらに知見を深めることができた。

以上のように、本会議では、新疆とカザフスタンのウイグル人の歴史・社会・文化について考究している第一線の研究者たちが場を同じくし、最新の研究成果の提示を行い、情報交

換と議論を進めることができたと言える。とくに、新疆とカザフスタンという国境をまたぐ両地域の問題にアプローチすることを通して、ウイグルという民族的呼称・枠組が出現した時期から現代へと至る歴史的な変容プロセスと現状の一端に、複数の発表を通して、具体的事例の検証を基礎としながら光が当てられたことは、特筆に価すると考える。この点、本会議は一定の成果を挙げたと判断される。

しかし、新疆・中央アジアを含めたウイグル人社会と民族意識の問題に関する研究は、民族意識の歴史的な形成・定着過程の具体相、政治的・社会的文脈におけるその発現の様態、各国家のウイグル人社会における状況の偏差と共通性、といった側面だけを見ても、いまだ未検討の領域が広がっている。今後、個別の考究をそれぞれ深化・進展させていくことはもちろんのこと、国際的な規模で歴史学・人類学・政治学・地域研究など、多様な分野の研究者が成果の知見を不断に交換できるような枠組づくりも必要とされているように思われる。本会議を足がかりとしつつ、近い将来、ウイグル研究において国際的な学術交流の場がふたたび設定されるべく努力したいと考えている。

なお、本国際ワークショップの成果として、英語論文集の刊行が予定されている。

プログラム

11月25日(土)

【趣旨説明】 新免康 (中央大学) (Yasushi SHINMEN, Chuo University)

【セッション1】 司会：小松久男 (東京大学) (Hisao KOMATSU, Tokyo University)

アブレト・カマロフ (カザフスタン共和国教育科学省東洋学研究所) (Ablet KAMALOV, Institute of Oriental Studies named after R.B.Suleimenov, Ministry of Education and Science of the Republic of Kazakhstan)

The Uyghur national history in the beginning of the 20 century: Nazarghoja Abdusemiatov (Uyghur balisi) and his historical works

シヨーン・ロバーツ (ジョージタウン大学) (Sean ROBERTS, Georgetown University)

Imagining Uyghurstan: The Bolshevik Revolution and the Making of the Modern Uyghur Nation

【セッション2】 司会：小松久男（東京大学）(Hisao KOMATSU, Tokyo University)

清水由里子（中央大学大学院博士後期課程）(Yuriko SHIMIZU, Chuo University)

On the New Educational Movement of the Uyghurs in Kashghar in the 1930's

王建新（中国中山大学）(WANG Jianxin, Zhongshan University)

Islamic Education in the Republican Turpan

11月26日（日）

【セッション3】 司会：澤田稔（富山大学）(Minoru SAWADA, Toyama University)

藤山正二郎（福岡県立大学）(Shojiro FUJIYAMA, Fukuoka Prefectural University)

Pluralistic Medical System in Xinjiang and the Uyghur Ethnic Identities

リズワン・アブリミティ（九州大学）(Rizwan ABLIMIT, Kyushu University)

Chinese Language Education in Uyghur Schools of Xinjiang（ペーパーのみの参加）

新免康（中央大学）(Yasushi SHINMEN, Chuo University)

Uyghur Cultural Movements in the 1980s and 1990s in Xinjiang

【セッション4】 司会：梅村坦（中央大学）(Hiroshi UMEMURA, Chuo University)

岡奈津子（日本貿易振興機構・アジア経済研究所）(Natsuko OKA, Institute of Developing Economies, JETRO)

Control of Ethnic Movements in Kazakhstan: A Case of Uyghurs

ガードナー・ボヴィンドン（インディアナ大学）(Gardner BOVINGDON, Indiana University)

Contentious Politics in Modern Xinjiang: the Evidence of Organized Resistance to Chinese Rule since 1949（ペーパーのみの参加）

【総合討論】 司会：梅村坦（中央大学）(Hiroshi UMEMURA, Chuo University)

ディスカッサント：

宇山智彦（北海道大学）(Tomohiko UYAMA, Hokkaido University)

堀直（甲南大学）(Sunao HORI, Konan University)

吉田世津子（四国学院大学）(Setsuko YOSHIDA, Shikokugakuin University)

湯浅剛（防衛研究所）(Takeshi YUASA, National Institute for Defense Studies)

[付記] 恐縮ながら、この場を借りて、本研究ワークショップの関係者各位に感謝の意を表したいと思います。とくに多忙のなか、当方の依頼に快く応じ、貴重な研究成果を披露する労をとられた発表者の方々に、また、貴重な意見・問題提起をいただいたディスカッサントの方々と完璧な議事進行をされた各セッション・総合討論の司会の方々に、衷心より御礼申し上げます。また、スタッフとしてお手伝いいただいた若手研究者の方々（今堀恵美、河原弥生、田中周、野田仁の各氏）にも大変お世話になりました。

（中央大学文学部）